

2024（令和6）年度浜松市医療奨励賞受賞者及び研究概要

| | |
|-----|--|
| 受賞者 | 聖隷三方原病院 小児科 (代表：木部 哲也) |
| 論文名 | 重症心身障がい児のための包括的な呼吸ケアの評価スケール開発に向けた取り組み |
| 概要 | <ul style="list-style-type: none"> ・周産期医療・新生児医療の進歩に伴い救命率が向上する一方で、重症心身障がい児（者）は年々増加傾向にある。重症心身障がい児（者）は長期にわたり医療的ケアが必要となるが、病院だけでなく、検査機器が十分に配置されていない在宅や療育・療養施設でも生活している。 ・重症心身障がい児（者）の生活の質の向上のためには特に適切な呼吸管理が必要であるが、そのためには呼吸状態の評価方法の導入が不可欠となる。 ・そこで在宅や療育・療養施設でも日常的に観察可能な評価項目から呼吸機能を経時的にスコア化できる評価スケールを独自に開発し、施設内の重症心身障がい児（者）に適用したところ、有用性を確認できたということである。 ・重症心身障がい児（者）が生活するそれぞれの場所で実用的な評価スケールが導入されれば、指標に基づいた適切な医療介入や感染症等の早期発見など、生活の質の向上につながることからその意義は高く評価された。 |

| | |
|-----|--|
| 受賞者 | 浜松医療センター 整形外科 (代表：森田 大悟) |
| 論文名 | 大腿骨近位部骨折患者における 8050 問題 —世帯構造と全身（栄養）状態、対側骨折発生との関係— |
| 概要 | <ul style="list-style-type: none"> ・超少子高齢社会において様々な分野で過去に経験しなかったような課題が次々と浮彫になってきており、全世代型の地域包括ケア、医療・介護・福祉の連携だけでなく生活全般を支える重要性が指摘されている。 ・整形外科領域においては、高齢化の進展で今後ますます大腿骨近位部骨折患者が増えると予想されているが、今研究ではこの疾患と居住環境に関連がないか検討された。 ・大腿骨近位部骨折のため手術加療を行った症例を対象とし患者の背景因子を分析したところ、いわゆる 8050 問題があると患者の栄養状態が悪く、反対側にも骨折が起きやすいことがわかったということである。 ・実臨床において今までほとんど検討されてこなかった新しい観点から切り込み、政策課題を鮮明に示した今研究は、医療介護のみならず、生活・まちづくり・社会構造にも影響を与える極めて重要な意義があると評価された。 |

| | |
|-----|---|
| 受賞者 | 浜松労災病院 心臓血管外科 (代表：島本 健) |
| 論文名 | 県西部の急性大動脈解離の患者さんを救うための努力 |
| 概要 | <ul style="list-style-type: none"> ・循環器疾患については、令和2年に基本法に基づく循環器病対策推進基本計画を国が策定し、県においても対策が進められているが、地域医療においては医師不足などからいまだ十分な医療が確保できているとは言えない。心臓血管外科領域については、浜松市内でも限られた医療スタッフの献身的な努力により必要な医療が何とか確保されているのが現状である。 ・今回は循環器疾患の中でも特に緊急性が高く重篤な疾患であるA型急性大動脈解離について、診療体制全般を見直し、患者情報のチーム内での伝達を速やかにする・手術の質を上げる・手術にまつわる時間を短縮するなどの取り組みを行った結果、救命率の向上につながったということである。 ・全診療科の中でも特に激務と言われる心臓血管外科の臨床をこなしながら、よりよい医療の提供を目指した今回の取り組みは、市民の生命を守り健康保持につながることから高く評価された。 |

| | |
|-----|---|
| 受賞者 | 一般社団法人 浜松市医師会 感染症対策委員会 (代表：古橋 一樹) |
| 論文名 | 病院感染対策チームと医師会の協働による新興感染症対策に向けた浜松地区の医療連携体制構築の取り組み |
| 概要 | <ul style="list-style-type: none"> ・薬剤耐性菌の拡大、新型コロナウイルス感染症のような新興感染症の発生に対する対策が世界的な課題として取り上げられている。 ・新型コロナウイルス発生時には、多くの地域で、病院間だけでなく地域医師会や診療所・クリニック、保健所などの行政機関の連携の不足が指摘された。 ・そこで浜松市においても医師会・開業医と病院、行政が連携するため、病院・診療所・クリニック等が一堂に会し、定期的な合同カンファレンス、各施設の感染状況の調査と結果の共有、訓練・講習会の開催などさまざまな取り組みが始められた。その結果、地域の課題が見える化され、病院と診療所間の顔の見える関係の構築が進んだということである。 ・市内の医療関係者が密接な連携体制を構築することで、感染症に対する対策の持続的なレベルアップが計られ、ひいては市民の安全安心につながる取り組みであり、その意義は高く評価された。 |